

丘上の食人鬼（バルー）像

山形洋一

ヤンゴン環状線と国道4号線（ネピドー・マンダレーに向かうハイウェイ）の交点に、チャイツ・カレーの駅がある。標高わずか10メートル余りだが、環状鉄道で最高点だそう。



駅のすぐ北にチャイツ・カレーのパゴダがあり、国道に沿ってさらに北へ1キロゆくと、チャイツ・カローがある。「チャイツ」はモン語で仏塔のこと。大塔シュエダゴンも、モン語ではチャイツダゴンと呼ばれているそう。

二つの寺のうち大きいのは北のチャイツ・カローで、境内が広く、塔も高い。参道にはさまざまな額絵が飾られている。ジャータカ、仏陀の伝記、地獄絵、夢の解釈など。その稚拙さは日本のぞきからくりなみ、紙芝居以下である。

この地は 1824 年から 26 年まで続いた第一次英緬戦争の激戦地のひとつだった。ビルマ軍の猛将マハ・バンドゥーラが 5 万の軍勢を率いて立てこもり、英軍をさんざん悩ませた。ヤンゴンの港からわずか 22 キロメートル。ずいぶん局地的な戦いだったわけだ。もう一つの激戦地シュエダゴンと比べて、地形は緩やかだが、当時は鬱蒼たるジャングルに覆われ、あちこちに落とし穴が仕掛けられ、桁外れな雨と泥、病気と飢餓が加わった。ベトナムでの米軍の苦戦を考えれば、1 世紀以上前の英軍が攻めあぐねたのも無理はない。

チャイッ・カローは 1897 年の旅行案内書にも、ヤンゴン近郊の行楽地として取り上げられ、3 月の祭りのころ、とくにバゴー方面からモン族の人たちが大勢参詣する、とある。

祭りの日に確認したことはないが、駐車場の広さから見て、今でも巡礼が多く訪ねてくることがあるのだろう。

平日に信者の動きを見ていると、境内の隅に安置されている食人鬼「バルー」に供物をささげ、熱心に祈る姿が目につく。

墓をあばき死肉をむさぼるバルーの話は、現代映画でもしばしば採用される。上下の犬歯が異様に発達したバルー像は、市内あちこちの寺にあるが、中でもシュエダゴン・パゴダ境内の北出口脇の像は信仰を集めている。かつて 1 対あったが、1 体盗まれたそうで、以来とくに警備が厳しい。

モン人にとって「食人鬼」は想像の産物ではなく、実在していた。ビルマ族に先駆けてイラワディ・デルタに進出したモン族は、「ネグリート」と呼ばれる小柄で肌の黒い先住民と衝突する。ネグリートは水泳が巧みで海から近づき、モン族の乳児を攫っては食ったそうだと (Nai Pan Hla (2013). *A Short Mon History*. MKS Publishing, Yangon. 38 頁)。

だがチャイッ・カロー寺のバルーに、剽悍な蛮族のイメージはない。でっぷり太って目じりが垂れ、血走ってはいるが悲しげな目つきには、あきらめすら感じられる。むしろ、安寧をむさぼり、ビルマ族に攻め立てられたモン族の、自虐的カリカチュアではなからうか。